破門ですか？よかったぁ！これで軍艦道に入れますよ！

如月　霊

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いきなり神様に「死んだから転生じゃ！」と言われて転生した先は戦車道と軍艦道が両立する不思議なガルパンの世界!?軍艦好きが転生したのは不幸にも戦車道の大御所、西住流本家の西住みほだった。「軍艦道がしたいのになんで戦車道なの～！」

下手でも気にしない！気にしない！

目次

プロローグ ―――― 1
転生したら戦いの真っ只中⁉ ―――― 6
さぁ、私の思いの上で… ―――― 10
第三話　車の中の楽しき会話 ―――― 14
転校初日に面倒なッ‼ ―――― 18

プロローグ

やぁ、僕の名前は長門　時雨（ながと　しぐれ）だよ。僕はね、あの世界のビッグセブンの一角、大日本帝国海軍の象徴　長門型戦艦一番艦長門の名前と唯一レイテ沖海戦で生き残った第一遊撃部隊第三部隊通称西村艦隊所属の白露型駆逐艦三番艦　時雨の名前を受け取っているって事が自慢のごくごく普通の高校生だよ。それで今はというと…

「あ、このお茶美味しいですね」
「そうじゃろ！そうじゃろ！これは伊勢茶の新茶だからのう！」
　はい！真っ白い空間でお爺さんとお茶を飲んでいるのです！…ん？えっ⁉お爺さん誰⁉何があったの⁉というかここどこ⁉
「ああ、落ち着きすぎていて、ワシも説明しわすれてたわい」
　そう言ってお爺さんになだめられた。するとお爺さんはさらに１０ｔ爆弾を投下してきた。
「まぁ、簡単に言うならじゃがな。ワシは神様でここはワシの執務室じゃ。それから君は死んだからここに来たのじゃな」
　Ｗｈｙ？えっ？死んだの……まっさかぁ！
　僕は楽観視をしたくてそう思いきらせる。しかし、それを良しとせんと神様が追いうちをかける。
「いや、死んでしまだぞ」
　マジですか…というか！

「なにナチュラルに心呼んでんですか!!」
　僕は神様にツッコミを発動する。すると神様は軽く謝ってきた。
「すまんすまん」
「で？僕はどうなるんですか？天国ですか？地獄ですか」
　僕はこの先の運命を聞いた。すると神様の口からまたまた爆弾発言が出てきた。
「いや？違うよ？」
　えっ…まさか！消滅!!消滅なんてぇ～（涙
「いや！違うよ!!転生!!転生してもらうから!!」
　転生と聞いて僕は神様に質問をした。しかし、その質問は途中でかき消された。そして転生以外に道が無くなり、その場で転生を選んだ。

「…もし転生しなかった「消滅しかないよ？」転生します！」
　消滅コワイ。そう思いながら僕は神様から転生先を聞き出した。
「で、どこに転生させられるんです？」
「君さ、ガールズ＆パンツァーってアニメ知ってる？」
「知ってますよ。小説家全巻有りましたし、なんで戦艦とか無いのかなぁ～とか思ってましたからね。けどどうして…」

…まさか⁉

「そのまさかじゃ！」

またまた神様が心を直接読んで叫びを上げた。

「まさか、そこに生身だけで転生とか無いですよね？」（心読んだのはこの際は黙ってよう）

「大丈夫じゃ、転生特典は幾つでも付けていいぞ」

まさかの破格の事を聞いた僕はなぜそんなにも良いのかを聞き返す。

「あの、幾つでも良いんですか？」

「うむ、此方の不手際じゃからの」

さ、さいですか…

「ならまずは軍艦や戦車を制作、修理、改造等を出来る基地とそれらをするための資材、資金等を無限に下さい。あとは指揮能力や身体能力、反射能力、制作などに必要な頭脳、指揮に必要な頭脳とかもお願いします」

僕がそう言うと神様がメモを採り終わり、口を開いてきた。

「後おまけで戦車道と軍艦道ってのがあるようにしておくわい。さっ！転生じゃ！転生！」

そう言うと神様はそそくさと僕を転生させた。しかし、転生する際に神様が軍艦道を

すると意気がっていた僕にさらに爆弾発言（三度目）をしてきた。

「時雨君の転生先は戦車道の西住流本家の西住みほじゃからなぁ～」

そう聞こえて叫ぼうとしたがその前に僕は意識を失った。

転生したら戦いの真っ只中⁉

よし！転生完了したね…って！ここ戦車の中じゃん！そう思った矢先に戦車の近くに敵戦車の砲弾が着弾した。

「車長！どうすれば！」

冷静になれ、冷静に。そう心を落ち着かせて指事をする。

「回避行動初め！急ぎ森の中に後退！」

「りょ、了解！」

操縦者が返事をするとみほの戦車はジグザグに後退し、森の中に逃げ込んだ。森に入ってすぐに洞穴を見つけて戦車をその中に入れるとみほは隊長の車両に通信を入れた。いやぁ～みほの記憶があってよかったですよ。分かったのは今は黒森峰の中での演習で敵は姉のまほが隊長をしているらしい。そして私のいる隊は劣勢というなのもとに負けかけていて残りは私と隊長車両を含む3車両のみとなっていた。

「隊長、こちら西住です。応答願います」

『こちら隊長車両。どうしました』

「私の搭乗する戦車の独断専行を許可していただきたく思います」

『なっ！何を言っているんですか！『変わりなさい』』
　おっ！隊長さんのお出ましか
「隊長、西住車両の独断専行の許可を下さい」
『それを出したところで負ける事に変わりわないわ』
　なんだ？負ける気でいるのか？バカだな。
「なら私が勝って見せますよ」
『…わかりました。独断専行を許可します』

　意外に素直…

「独断専行の許可、ありがとうございます」
　みほが礼を言ったところで隊長との通信が切れた。それを確認するとみほは搭乗員に作戦を伝える。
「隊長から独断専行の許可が出ました。下準備を開始しましょうか」
「砲塔を後ろに向けてからあのへこみに向けて前進してください」
「だ、だけどそれだと落ちてしまいますよ！」
「それでいいんですよ。それが作戦なんですよ」

「わ、わかりました」
　反論した操縦員はしぶしぶながら戦車を進めてへこみに落ちた。戦車がへこみに落ちて戦車が斜めに傾いた。斜めに傾いたのを確認したみほは砲弾を装填してなにやら空を狙いだした。
「仰角上げ！＋４６°！」
　みほは発射菅を握り、発射体勢を取る。
「撃てー！」
　しばらくしてから発射菅を握り砲弾を空に向かって発射した。するとみほは懐中時計をポケットから出して数字を数え始めた。
「着弾まで…3…2…1…着弾！、今！」
　みほはそう言うと懐中時計の蓋を勢いよく閉めた。それとほぼ同時に崖の上に煙が立ち上ぼり試合終了の合図が鳴った。
――――――ピィッ！ピィー！――――――
『Ａチームフラッグ車走行不能！よってＢチームの勝利！』
　やりました（キリッ！

すると搭乗員達の喜びの声が上がっていた。やっぱり勝利は戦略次第です！みほは搭乗員達の喜びを見ながら心の中でそう思っていた。

さぁ、私の思いの上で…

私が転生してから二年が過ぎて今は黒森峰対プラウダの戦いの真っ最中だ。あれから私は三年生や上級生といった戦車道の仲間との仲を確立させていった。そのおかげで部の中での好感度がまほを押さえて一位になってきていた。

そして原作にあった戦車を見つけた。

「全速で前方の戦車の前に滑り込んで！」

するとみほの戦車は前方の戦車の前に滑り込んで主砲を敵に向けて放った。すると敵も主砲を放って来た。そしてみほの戦車と敵のフラッグ車にほぼ同時に砲弾が命中し、白旗が上がった。しかし、その後に行われた写真判定の後コンマ３秒ほど敵の方が早かったから勝利はプラウダに渡ってしまった。そこで原作では虐めがあったが、みほは好感度が高かった為に、それらのことは起こることはなかった。逆に「だいじょうぶ！」「みほのせいじゃないさ！」などと皆が励ましてくれていた。

そして…その翌日、みほは西住流家元に呼び出された。

□■□■□

時は変わって西住流本家

「黒森峰は今大会で１０連勝を逃し、準優勝ですか…」

「…」

「し、しかし、お母様！みほは側で川に落ちそうになった戦車をかばって…」

「犠牲なくして勝利はありえません」

なに言ってんだ？こいつ（イラッ

「よってみほ、あなたを西住流から破門します」

「し、しかし…」

しほの破門宣言を聞いたみほは、ポケットから紙を出してしほの前に置いた。

「なら、この書類にサイン下さい」

「なんですか、これは」

書類を見るなり、しほは、みほに質問した。

「これは、ここを出ていくにあたっての書類ですよ？」

それをみほは、笑顔で返した。それを聞くなりまほは、止めようとしたが家元がそれ

を止めた。
「よしなさい！まほ！」
「し、しかし…」
「はい、みほ」
　そしてしほは、みほに書類を渡した。それを確認するとみほは、しほに書類を見せつけて、書類の内容を話した。
「ありがとうね？元お母さん？」
　それを聞いてしほは、聞き返した。
「元とはなんですか、みほ」
　それを聞いてみほは笑いだしながら答えを教えた。
「ハハハッ！いいでしょう。教えてあげますよ」
「この書類は養子についての書類でしてね。じゃあ！」
「なっ！みほ！」
　そう言って私はしほの襖を閉じ、玄関に向かった。そして玄関を出たところでしほが追い付いてきた。するとそこに一台の車が止まって一人の女性と一人の少女が出て来た。
「お迎えに上がりました」

その少女を見るなり後からやって来たまほが驚いたように呟いた。
「…エリカ…なぜ」
それを聞き流したみほはしほ達の方向を振り向き、喋りだした。
「紹介しましょうか、彼女は私の副官の逸見エリカさん。そして…」
「私の新しき母になってくれた戦車道島田流家元〝島田千代〟さんだよ?」
「お久しぶりね、しほさん?」
「クッ!」
そう言うとしほは、苦虫を噛み潰したかのような顔をした。それを無視してみほは、車に乗り込み、ドアを閉める時にしほに一言言った。
「さようなら、西住流の皆様?」
それを聞いたしほ達はその場で、車をただただ見ているしか無かった。

第三話　車の中の楽しき会話

車内

「フ、フフッ。アハハハ！西住しほのあの驚いた驚いた顔は最高だったわね！」

西住流本家が見えなくなると直ぐに千代がこらえていたものを出し、笑いだしたた。

「ええ、母様、思い出すと…プッ」

「みほ、…流石に…笑うのは…」プップッ

□■□■□

しばらくして千代がみほに人差し指を立てながら話し出した。

「みほ？そんな堅苦しくしなくてもいいのよ？」

「／／／じゃ、じゃあ。お母さん」

「うん！よろしい！」

千代がみほにそう言った後にみほはなぜ自分を養子にしようと思ったかを聞いた。

「あっ、そうだ。お母さん」

「どうしたの？」

「私を養子にした理由ってなんなの？」

「みほが軍艦道方面で有名なのを知ってたから？」
　それを聞いたエリカが思い切り食い付いてきた。
「えっ！みほって軍艦道したことあるのか⁉」
「みほはしたことあるってレベルじゃなくてプロ以上の力があるわよね～」
　ハァー、バレてたんだ…てか、偽名使ってたよね、私…
　千代とエリカに知れていた事がわかってみほは観念して白状した。
「うん、そうだよ。西住しほがうるさくなるから偽名使ってしてたんだよ」
　それを聞いてエリカが質問を出してきた。
「どんな偽名使ってたの？」
　エリカに偽名の話を質問され、みほは千代をチラッとみて〝言わなきゃダメなの？〟と送った。しかし、千代は〝言わなきゃダメよ♪〟と言いたげな顔をしてきた。それを見たみほは偽名を話すことにした。
「…私の偽名は青葉　時雨（あおば　しぐれ）って名前だよ」
　それを聞いたエリカは驚きを隠せない様子で叫んだ。
「えっ⁉あのプラウダ対黒森峰の試合で飛び入り参加して形成を逆転させたって言うあの⁉」
　エリカの言っていることは事実だった。みほは数年前に黒森峰にあまり言い思いは

持っておらず前世から個人的に好きなプラウダに急な代役として仮面を着けて飛び入り参加し、逆転勝利させていたのだった。
「私って仮面してなかったっけ？」
「ふふ、そんなの島田流にかかればいちころよ」
「個人情報じゃなかっけ？…」
　みほはそれを聞いてほんの少し引いたのだった。それからみほはこれからの事を話した。
「そう言えばお母さん？」
「どうしたの？」
「私の転校先なんだけどさ、大洗学園にしてほしいんだけど…」
「良いけど…どうしてそこなの？」
　千代はみほになぜ大洗学園を選んだのかを聞いた。
「それは未だ無名な所で勝利をもぎ取れば島田流の名前が知れわたるからかな？」
「う～ん、わかったわ。軍艦道島田流の事は貴方に任せることにしているから良いわよ」
「ありがとうお母さん」
　みほは千代に礼を言うとエリカの方を向いて話し出した。
「エリカ、貴方には私の副官として共に来てくれるよね？」

「もちろんよ、私はみほに付いていくと決めたから」

～～～～～～～～～～～～～～

その2日後、みほとエリカは転校の準備を済ませ、大洗に向かったのだった。

転校初日に面倒なッ‼

大洗学園に転校した初日みほはエリカと共に学校へ向かう途中に倒れている人物を発見した。原作に出てきたあんこう隊操縦者、冷泉麻子その人だった。すぐさまみほとエリカは麻子の元に駆け込み、声をかけた。

「だ、大丈夫ですか?!」

「…む…い」

「えっ?」

「…ね、眠い…」

そうはっきりと聞こえたみほは、心の中でガックリと肩を落とした。

寝落ちしただけなのかよ…

そう思いながらもみほはエリカに麻子を大洗学園までいっしょに運ぶように促した。

「エリカ、この人を大洗学園まで運ぼう」

「はい、そうしましょう。見たところ大洗学園の生徒のようですし」

「よし、じゃあ運びましょうか」

みほ達はそう言うと二人で麻子の肩を持ちながら大洗学園に向かった。

□■□■□■□■□

あの後みほ達は麻子を校門前にいた風紀委員に受け渡し、教室に向かった。そして教室に入るとみほとエリカは先生に自己紹介をするように言われた。

「「おくれてすいません！」」

「ん？君達が転校生か、よし。自己紹介をしてみてくれ」

「「はい」」

「島田みほです。仲好くしてくださいね」

「逸見エリカです。みほの〝副官〟をしていますのでよろしく」

(((副官ってなんだァァァ‼)))

エリカの副官という言葉にクラス全員が頭に疑問符を上げたのだった。

□■□■□■□■□■□

～その時間の休み時間～

「ねぇ、島田さん」

みほは休み時間に入ってから後ろから誰かに名前を呼ばれて返事をした。

「どうしたの？」

「私は武部沙織だよ。よろしくね」

「うん。沙織さん。私の事はみほでかまわないよ」

「じゃあさ、逸見さ「エリカでいい」エリカさんが副官って？」
沙織は自己紹介をしていたときに不思議に思ったことを口にした。
「副官は自分の補佐官。一言で言うなら親友かなー」
「へぇ～ならさ。みほは何で転校してきたの？」
(((ぶっちゃけやがったァァァァ‼‼‼)))
「他に自分の家が絶縁状叩きつけて今のお母さんに養子にしてもらったからかな」
(((何そのアグレッシブさ⁉)))
クラスで聞き耳を立てていたクラスメイト全員が固まった。それは沙織も例外ではなかった。そして元に戻った沙織がまた質問をした。
「す、すごいねみほ…」
「そんなことないよ。普通普通♪」
(((なにそれ⁉全然普通じゃないよ⁉…)))
「さて、もう授業始まるし座ろうか」
みほがそう言い指を指した先には授業開始一分前を指している時計があった。そしてそれを見るなり沙織達は急いで席について次の授業の準備をした。